

2009年3月25日

村上清さんを偲んで

一橋大学 高山憲之

年金評論家の村上清さんが2008年12月14日にお亡くなりになった(享年82歳)。村上さんは1960年代の中頃からほぼ40年間にわたり年金評論家として旺盛な言論活動をつづけてこられた。在りし日の村上さんを偲び、その輝かしいご功績の一端をここに記すことにする。

村上清さんは“先見の明”の持主であった。誰よりも早く、日本における年金の将来を鮮やかに切りとることができた人である。まさに稀有の能力に恵まれた非凡な人であった。以下、その例を3つ列記したい。

第1。日本の公的年金は賦課方式に基づいて財政運営されている。そのことを日本ではじめて指摘したのは村上清さんである。当局による公式見解は、(修正)積立方式に基づく財政運営というものであった。1966年改正で、いわゆる1万円年金(厚生年金における給付月額モデル水準)が実現したとき、政府は修正積立方式論に基づいて将来の年金保険料を9%程度(労使込み)と見込んでいた。その見込みが非現実的であることを鋭く指摘したのが村上さんであり、将来の年金保険料は9%の4倍、36%(旧来の標準報酬月額ベース。現行の総報酬制の下では27%程度)になると看破したのである。将来の公的年金財政が賦課方式で運営されることを一早く見通した的確な予見であった(村上清著『退職金と年金制度の将来』ダイヤモンド社、1969年刊)。当局が旧来の公式見解を捨て、公的年金が賦課方式に基づいて運営されていることを繰り返して説明するようになったのは、村上さんによる最初の指摘からほぼ10年が経過した1970年代末のことである。

第2。1973年は“年金の年”と呼ばれ、年金の自動物価スライド制や、いわゆる5万円年金が実現した年であった。第一次石油ショック直前、多くの国民が高度経済成長の美酒に酔いしれていた年の年金改革であった。厚生年金の給付水準(モデル年金)は賃金の60%に設定された。この年金改革を世論はこぞって歓迎した。批判を封じるような空気が支配していたのである。そうした中であって村上清さんは、モデル年金の給付水準が将来80%超まで上昇することを誰よりも先に見抜き、将来の過大な負担による財政の崩壊を防ぐためには給付水準に上限を設定すべきだと主張した(村上清「厚年5万円年金案の問題点」『週刊社会保障』1973年2月12日号)。ただし、その主張は当時、政治家や政策当局に黙殺されてしまった。当局が村上さんの指摘を真摯に受けとめ、生年月日別に給付乗率を引き下げたのは1985年であり、村上さんの指摘から10年以上たった後のことであった。

第3。厚生年金基金は税制適格年金と並ぶ日本の代表的な企業年金であった。厚生年金基金は公的年金である厚生年金給付の一部を国に代行して支払う。その代行について村上清さんは当初

から慎重なスタンスをとりながら解説していた。その後、厚生年金に自動物価スライド制が導入されることになり、村上さんは意を決したかのように代行そのものの論理矛盾を鋭く突きはじめた。すなわち賦課方式で運営されている公的年金を積立方式の私的年金で代行するのは財政上無理だと断言し、厚生年金基金は早晩いきづまると警告したのである（「厚生年金基金による代行の将来」『生命保険経営』1989年11月号）。村上清さんの警告は、厚生年金基金制度のさらなる普及を意図していた人びとの思惑とは真正面から対立する内容であったが、その警告の正しさはバブル崩壊後になって、ようやく広く認められるようになった。厚生年金基金の解散があいつぎ、代行返上ラッシュが起こったからである。

村上清さんは“正論の人”であった。年金をめぐる議論は昔も今もロマンや感情論にとらわれたものが多い。身勝手なご都合主義であるかのような主張も少なくない。そうした中であって村上さんは、曇りのない無私の眼で常に年金を凝視し、ロゴスを大事にしながら堂々と正論を述べつづけたのである。ときに、勤務先（日本団体生命）の役員や業界関係者さらには年金を所管する官庁等からの誤解や反発、中傷・誹謗等も予想されたに違いない。それらに臆することなく、将来世代や一般サラリーマンの利害にも配慮した、バランスのとれた主張を村上さんは常に勇氣をもって展開したのである。年金研究者にとって村上さんは、まさに“導きの糸”であり、北極星のような存在であった。

村上清さんは類まれな啓蒙家でもあった。NHKテレビ等の年金番組に多数出演して年金のしくみをやさしく解説する一方、『年金の知識』『企業年金の知識』（いずれも日経文庫）を公刊し、年金に対する国民の理解を深める努力を惜しまなかった。リズムカルで軽やかな語り口が村上さんの身上であった。

村上清さんは年金研究者として世界ではじめて認められた日本人でもあった。まさに我われ日本人の誇りである。終戦後に来日し、「マイヤーズ勧告」を執筆したことで知られるR.マイヤーズ氏をはじめとする外国人は、日本の年金のことになると村上さんにまず聞くというのが通例であった。ILO等、外国における招待講演も少なくなかった。村上さんは、そうした実績をふまえて、世界における年金の常識を日本に紹介しながら、日本の一部にみられた年金の非常識（たとえば公的年金民営化論や公的年金の積立方式化など）を批判しつづけたのである。

村上清さんは国家公務員等共済組合審議会委員、地方公務員共済組合審議会委員をはじめとする共済年金関連の公職に多数就任し、年金制度の安定化にも少なからぬ貢献をした。どういうわけか年金審議会委員には声がかからなかったものの、名誉欲や虚栄心とはいっさい無縁の人だった。

村上清さんは年金の専門家として“深く”生きた人である。見事な人生であった。ここに謹んで村上さんの卓越した幾重にもわたる偉大なご功績を讃えるとともに、ご冥福を心よりお祈りする次第である。